

中瀬有紀

## 健康第一



© Yuki Nakase

コーチ 2019年春夏コレクションのランウェイ

ニューヨークの秋は急にやってきて、しかもとても短く、あっという間に寒くなります。今年はこちらでUSオープンが開幕した8月の終わりに珍しく日本のような厳しい残暑に見舞われましたが、その後、ぐずついた天気が続き、9月の頭に開催されたニューヨーク・ファッション・ウィークの一週間は、一雨ごとに気温が下がってゆきました。一日最低でも16時間以上働き続けることになるその一週間に、野外や空調のない(というか予算の関係で本番日以外は空調を使えない)倉庫跡地での仕事が続き、元気がとりの私ですら風邪を引いてしまいました。本番日に風邪であることを隠し続けて無事に一仕事を終えたは良いものの、次の週に控えている次の仕事の準備が心配で寝込んでいられません。優秀な照明家があふれているニューヨークでは、もし体調不良などで仕事ができなくなっても、私の代わりになる人は山ほどいます。誰からも体調不良を責められることなく、ただ簡単に首が切られるだけです。好きな仕事に精一杯取り組むためにも、体調管理は最優先に考えるべきですね。

楽しく仕事をするためにも、また働きやすい環境づくりの貢献にも、自分の限界を知ることは大事だと最近になって気がつきました。「あれもこれも」と何でも挑戦してきた経験が今に生かされていることは確かですが、仕事を抱え込むことは良いことばかりではないようです。今年の秋は、働きすぎている大道具さんに多く出会いました。彼らの言い分としては、「急な変更や遅い発注が原因で昼夜問わず働かざるを得なくなった」と言うことでしたが、無理をしても仕事を抱え込むのは、実は通常賃金の1.5倍となる残業代目当てであることが時給制の彼らの本音です。当人は数週間無理するだけで懐が暖かくなり良いことなのかもしれませんが、彼らがイライラし

ていてコミュニケーションが取りづらくなることや、残念ながら仕事の質が落ちることは明白でした。一生懸命働いたのに印象が悪い上に成果を収められずに次の仕事につながらない、というような不本意な結果を防ぐためにも、自己管理と仕事量の調節は不可欠のようです。

アメリカには日本のような優れた国民健康保険がないことと、私自身が「外人」であることが相まって、健康保険の維持にはずいぶん四苦八苦しました。数年前にデザイナーのユニオンに所属し、ユニオンが提供する健康保険に加入する資格を得てから、ずいぶん気持ちが楽になりましたが、ユニオンを通した仕事が減ると保険の資格が解約されるので、うかうかしてられません。また、私のような月々の保険料が低い設定の保険を持って医者にかかる、当然自己負担が高額であるために、体調を崩しても病院に行くことはほぼ皆無です。そのようなフリーランスのデザイナーや役者が駆け込むことのできるクリニック、サミュエル・J・フリードマン・ヘルス・センターは数少ない助け舟の一つです。マウント・サイナイ病院と役者基金が共同経営するクリニックは劇場街のタイムズスクエアに位置し、安心価格で医師に会うことができ、大きな病院へかかる足がかりとなります。

「健康第一」とは、日本で長年お世話になっている大先輩が、私にいつもかけてくださる言葉です。誰一人と知り合いのいないアメリカに一人で渡米した頃に比べると、今は私が風邪をひいたら「だいじょうぶ?」と気遣って生姜湯を作ってくれる友人たちに囲まれて、ずいぶん楽になったなと思います。日本のテレビ局で仕事をさせていただいていた頃、「本番日に風邪をひくなんてプロ意識が足りない」と叱られた若かりし頃を懐かしく思います。さあ、明日からまたがんばろう。